税金で運ぶ命

春日市立春日南中学校３年　　手島　愛里

母は、疲れて仕事から帰宅し、ソファーに倒れ込む。救急救命士、それが母の仕事であり、私の将来の夢でもある。最近は出動回数も多く、救急車が足りなくて大変らしい。更に、無料だからと言って救急車をタクシー代わりに使う人も多くいるという。

「だったら有料にしちゃえば。」

私はぐったりしている母に問いかけた。母は

「そうはいかないんだよ。考えてごらん。」

と眠そうな口調で言った。私は少し考えて

「なんで。」

返答がない。母はもう、夢の中だった。

そこで私は自分で考えてみることにした。そもそも救急車が無料なのは税金でまかなわれているからだ。だから、私たちは平等に助けてもらえるし、躊躇なく呼ぶことができる。しかし、逆に呼びやすいが故に前文のようなことが起こったり、病院側も多忙になったりと、本当に命の危険が迫っている人の所に行けなくなり、必要な処置が遅れてしまう可能性がでてくる。では、有料にするとどんなことが考えられるだろうか。もちろん安易な救急要請が減るかもしれない。しかし、お金の心配で呼べなくなってしまう人がいるだろう。それでは、救急医療としては元も子もない。調べてみると、救急車が無料の国は極めて少なく、無料が当たり前ではないことに気づかされた。私たち日本人は恵まれているのだ。

私は、母の言いたいことがようやく理解できた。救急車が無料で呼べるからこそ、経済的な格差による命の差が生まれることなく、平等に命を救うことができる。このようなことができているのはやはり、税金のおかげだ。

私は、「税金は払うのが当たり前。」そう思っていた。しかし、その払った税金が目に見えないサービスとなって日常生活に溶け込み、私たちの生活を陰ながら支え続け、豊かにしてくれていた。税金は日本国民全員が平等に払い続けてきた。その小さな積み重ねが救急車はもちろん、どこかで誰かの大きな支えとなっている。つまり、私たちは税金を通して無意識に支え合い、助け合っているのだ。私は、この素晴らしい助け合いの制度を残すべきだと思う。

母は仕事が楽しそうだ。私が幼い頃から時々、患者さんを助けた話や命の大切さを誇らしげに話してくれる。そんな母のように、私もこの手で人の命を救ったり、困っている人の生活を支えたりして誰かの役に立ちたい。そのためにも、納税の義務を果たせる立派な社会人となり、少しでも安心で優しい国づくりの手助けをしたい。

今は、払える税金はほんの少しだけど、それでもその税金がこの一瞬でさえ、誰かの役に立っていると思うと胸が少しだけあたたかくなった。